

# フィリピンとの掛け橋

第13号 日本聖公会九州教区フィリピン協働委員会発行

2008年4月4日

## ワークキャンプ特集



3月10日(月) 世界遺産の地底河川国立公園で

## 今年は沖縄教区からも2名参加

九州教区は、協働関係にあるフィリピン中央教区へ、3月4日(火)～14日(金) 5回目のワークキャンプのために6名を派遣。今年は沖縄教区からも2名の参加があり、同教区の離島パラワン州のナラにある聖グレゴリー伝道所とコンセプションにある聖ミカエルおよび諸天使伝道所の2箇所に分かれて働いた。その後、パラワン島で働く3人の教役者やその家族と世界遺産である、地底河川国立公園へバス旅行したり、マニラへ帰ってからも、レオン司祭の働くタガイタイを訪問するなど、労働と交流の有意義なキャンプを行った。

**参加者** 小林史明司祭(団長・熊本)(以下五十音順に)秋山みどり(熊本) 岩佐直人聖職候補生(沖縄・三原) 上原成和(沖縄・三原) 大館明子(熊本) 古澤はん奈(大分) 松山省太郎(戸畑) ベーカー博子(宮崎)

## キャンプ日程

3月4日(火)  
松山兄は、午前10時10分福岡空港発、中華航空で台

北乗換え、沖縄の2人と合流し、午後3時55分(現地時間・日本より1時間遅れている)マニラ空港着。あとの5人は、福岡をキャセイパシフィックで10時25分発、台北経由、香港で乗換えて、マニラ到着は午後6時40分。中央教区事務所で遅い夕食をとり、敷地内にある宿泊施設ホレブハウスに宿泊。

5日(水)  
5時50分、ホレブハウスを出発。マニラ空港からセブパシフィックで、パラワン島の州都プエルト・プリンセサに到着。聖マタイ教会でオリエンテーション。昼食後エチャネス司祭とナラグループ(NG)は乗り合い車で2時間移動し、ナラに到着。ダン司祭とコンセプショングループ(CG)は、洗礼者聖ヨハネ教会の礼拝。

6日(木)  
NGは、礼拝堂建設のため骨組み作業と床に入れる砂を取るため海岸へ。夕方までに骨組みが完成。CGは、ダン司祭の車でコンセプションへ。到着後、礼拝堂のペンキ塗り。

7日(金)  
NGはニッパ椰子の葉で屋根を葺き始める。CGは、仕上げのペンキ塗り。夜は、感謝のお好み焼き作り。

8日(土)  
NGは、朝は市場へでかけ、その後礼拝堂の完成まで働く。CGは、川へ洗濯や入浴を兼ねて出かける。

9日(日)  
NGは、聖アンデレと聖グレゴリーの2箇所で礼拝をし、昼食には日本の寿司を作る。お別れ会后、プエルト・プリンセサへ。CGは、聖ミカエルおよび諸天使伝道所で感謝礼拝。午後、プエルト・プリンセサ。合流して、ダン司祭宅で夕食。

10日(月)  
タグサオのマリオ執事一家も加わり、世界遺産の地底河川国立公園へバス旅行。夜は、教会の近くのレストランで刺身など、海の料理を食べる。

11日(火)  
市内観光後、昼は海岸でシーフード。パラワン博物館を見学。夜は聖マタイ教会の人々と夕食会と反省会。

12日(水)

空港へ送られ、マニラへ帰る。教区センターで昼食後、キリスト教書店へ2軒案内してもらう。夜はシェーキーズの Pasta とピザの店で食事。スーパーマーケットへ買い物にでかける。

13日(木)

朝からタガイタイのレオン司祭を聖バルナバ教会へ訪ねる。タール火山とタール湖を見て、教会で昼食。午後はショッピングセンターに寄り、夜は反省会。その後、青年や神学生と交わりの時を持つ。

14日(金)

朝からマニラ空港へ。中華航空とキャセイパシフィックに分かれ、乗り継いで、夜、日本に帰る。



( 椰子の実を肩にかける小林司祭 )

## キャンプの前と後

尚、2月10日(日)~11日(月)九州からの参加者による準備の話し合いが熊本で。そして3月31日(月)参加者とフィリピン協働委員との報告反省会が福岡の教区センターで行われた。キャンプの様子をまとめた音楽付きスライドのDVDが完成し、参加者に配布された。(必要な方は、小林司祭まで連絡ください。実費でお送りできます。)

## 目次

### 参加者の感想文

キャンプ日誌	小林史明	2
コンセプトチームのレポート	ベイカー博子	5
フィリピンワークキャンプに参加して秋山みどり		7
フィリピンワークキャンプふりかえり岩佐直人		8
フィリピンキャンプ感想	上原成和	9
フィリピンワークキャンプ感想	大館明子	9
2回目のワークキャンプ	古澤はん奈	15
フィリピンワークの全体的感想	ベイカー博子	16
フィリピンワークの感想	松山省太郎	17
今後の展望とお知らせ		17

## キャンプ日誌

司祭 フランシス 小林史明

今年は、ワークキャンプから帰って来ると、空港で菊池黎明教会の奥井喜美直が亡くなったことを知らされ、通夜、主日礼拝、お葬式、東京出張、聖週の集まりなど、大忙しで、やっとワークキャンプのDVDを作成した。キャンプ中にメモ書きしたものを掲載する。

3月3日(月)

正午過ぎに、福岡の教区センターに着く。カレーの出前をとってもらい、事務仕事をする。たくさんの献品があったので、2箇所のキャンプ地とその他のフィリピン中央教区への献品とに分けて、6個のダンボールに詰める。それ以上の献品は、福岡に残して、今後のキャンプに使うことにする。秋山、大館のふたり、そして古澤、ベーカーの4姉が順次到着。作業に加わってもらう。バイトの終了後、福岡に来るといふ松山君が到着。教区事務所からは、航空券、旅行保険証、キャンプ費用やフィリピン中央教区への寄付金など預かる。簗田姉、重益姉の車で、ベテル教会への移動中に、スーパーに寄って、翌朝の食事を買い、ジョイフルで夕食。ベテル教会では、教会を見学の後、準備の話し合いなどをして、就寝。

3月4日(火)

早朝、フルートの練習をした。6時50分朝食。主教が早く来られ、簗田姉妹、濱生司祭も到着して、荷物を積んで福岡空港へ。松山君が中華航空、残りはキャセイパシフィック。久留米から山崎司祭、山崎洋君、山口さんが見送りに来てくれる。松山君は預ける荷物が重すぎて(彼自身ではなく、一番大きなダンボールを彼の荷物にしたため)機内に持ち込む荷物を重いものに変更して、やっとチェックインできたらしい。毎年、日本酒を買っているのだが、今年も買おうとすると、直行便でない場合は、途中で取り上げられる可能性がある、とのアドバイスを受け、高級ボールペン6本を買うことにした。香港は大きな空港で、移動が大変。マニラ行きの飛行機に乗り込む頃に、松山君から、3人がマニラに着いたとの連絡が、電話で入る。フィリピン入国はスムーズ。シャロンさんが空港に来て、無事フィリピン中央教区に着く。ボレブハウスに入ったあと、教区センターで食事を

するが、外池圭二兄、原美根子姉などが来ていた。タクロバオ主教とも顔を合わせ、出納係のレティさんに、キャンプ費用の内の、中央教区事務所が立て替えている、キャンプ地の材料費とか、パラワン島への航空券費用など17万円、神学生支援の10万円、秋に司祭を招くための8万円そのほか、中央教区への献金などを渡す。ネッド司祭の所へ行くと、前日、妻のグロリアさんがシンガポールから帰国していた。

3月5日(水)

朝、5時50分にホレブハウスを出発。ホリオさんも来ていたので、彼にコーヒーを渡した。今年はドライバーが別に雇われている。ロリオダという名前。空港税を8人分1600ペソ。国内線空港は人々でごったがえし、弁当を食べるのも場所を確保するのが大変。交代で食べる。黄色い機体のセブパシフィックは、韓国には飛行機を飛ばしているらしい。飛行機に乗ると、国際線とは違い、クイズをやったり、楽しい。プエルト・プリンセサに着くと、楽隊が歓迎マーチ。イミグレーションがあり、パスポートの提示が要求される。独立国の印象があった。空港にエチャネス司祭とダン司祭などが迎えに来ている。聖マタイ教会に車で移動。エチャネス司祭の妻レイチェルに、パラワン島でのツアーや移動費など、直接彼らが立て替えている費用を21800ペソ払う。ダン司祭夫人ロメリンも交えて、昼食をとり、私はカラマンシージュースを飲む。ロメリンから2人分のマリアの薬をもらう。4人分だったはずなので、我々が先ず2人分をもらって、彼女と同行するコンセプショングループのものは、また追加して購入してもらう。食後は、この市の唯一のスーパーマーケットで水(大きなボトル2本と箱入りペットボトル2箱を716.25ペソ払って購入。我々4人(秋山、岩佐、古澤、小林)は、エチャネス司祭と共に、乗り合いタクシーみたいな車(イスラエルではシェールートタクシーと言っていたが)に乗って、約2時間。ナラの町に着く。ナラという名前は、日本では「紫檀(したん)」という木のこと。フィリピンの国の木らしい。日本にも「ナラ」という町があることを説明。3日で建てるという教会を見る。夜はラモンさんの家に泊まる。夕食には、犬の肉が出たことを特記しておく。

3月6日(木)

早朝、5時10分頃だが、イスラム教のコーランが聞こえてくる。この町には2つのモスクがあるとのこと。その声に驚いて、しばらく起きていたが、そのあと寝すぎて、6時15分の起床に間に合わず、朝寝ぼう。朝食後

にデポーション。エチャネス司祭が岩の上と砂の上の家のたとえを話される。作業が始まったが、土地が低いので、海岸へ砂を取りに行くことになる。海は荒れている。バイクにサイドカーみたいなものを付けた、トライシクルで砂を運ぶ。近くのココナッツジュースを出してくれる店でしばらく話を聞く。昼は近くの家で食事をし、午後は釘打ちやのこぎりの作業を手伝う。秋山さんと古澤さんは木切れを掃除したり、子どもとケンケンや折り紙をしている。夕食前にインペラドールというブランドが用意され、それを目指してか、棟梁のフレッドさん親子のほか、大勢がラモンさんの家に集まり、岩佐君の持ち込んだシークワァーサー餅がきっかけになり、ココナッツワインの作り方が説明され、それでは明日はそれを見に行こうということになる。そして、ココナッツジュースは実から摂るが、ココナッツワインは花から摂ることを知る。また、ココナッツに蒸留酒はないのか聞くと「ランバノーク」という酒があり、これは保存できるらしい。ココナッツワインはすぐに酢(ピネガー)になってしまうが、これは大丈夫。ただ、原材料が、ココヤシではなく、プリヤニッパの木からできるらしい。

3月7日(金)

弟のメールで、横浜の遠藤主教が亡くなったことを知る。その後、鈴木司祭に問い合わせ、亡くなったのは6日(木)午後4時14分であることを知らされる。熊本の島さんからもそのことでどう対処するか電話が入る。メールで、教会としては特に必要はないことを知らせる。また、その後柴本司祭からも電話があり、沖縄教区から岩佐君が横浜の出身なので知らせてほしいとの連絡を受ける。この日は、岩佐君は屋根にのぼり、屋根をニッパ椰子の葉でふく仕事、私は礼拝堂の椅子を作る仕事をする。おやつにココナッツジュースとその中に実が細く切ったものが入って、おいしい。午後もその作業を続けた。

3月8日(土)

雨のため、朝はすぐには作業ができず、朝食後マーケットへ行く。おみやげになるようなものは買えなかった。教会周辺の人が、金、土、日曜日とプエルト・プリンセサの中国人から仕入れた雑貨を市場に出していることを聞く。昼食をはさんで、礼拝堂の仕事。順調に仕上がる。ラモンさんは、我々へのおみやげに楽器を作っている。フルーツのほかに、口の中ではじくアピラオ。手で打つブンカカなどを作っている。

3月9日(日)

朝、聖アンデレ教会へ行き、ウィリー・オイオコさんと



会う。彼は退職教師。棟梁のフレッドさんも教えたらしい。レイワーカー（信徒奉事者）のロザリオさんも来ている。子どもたちへ、秋山さんと古澤さんが、オイオコさんに助けられて、「何故フィリピン人は平らな鼻なのか」という紙芝居をする。私も、説教の一部にそれを使い、この話の重要性について語った。オイオコさんが、この紙芝居を置いていってくれ、と言われるのだが、他でも使うので、終わったら聖アンデレ教会へ寄贈することを約束。聖グレゴリー伝道所に移って、10時30分頃から同じように礼拝があり説教。その後食事をし、お別れのセレモニー。エチャネス司祭の祈りとラモンさんの挨拶のあと、4人が感想を語る。その間に、教会の人々による歌なども披露される。私はプエルト・プリンセサが独立国かのような印象を受けたこと。「ナラ」は日本の古い都であり、「良いリンゴ」という意味もあることを言う。最後に渡辺禎雄さんの版画とブックメーカーをプレゼントする。逆にラモンさんの手作り楽器を各自もらう。また、岩佐君と私は、マウンテンプロビンスのものと思われるチョッキをもらって、プエルト・プリンセサ行きの乗り合い自動車で帰る。所要時間は、1時間40分くらい。聖マタイ教会に帰った後、コンセプショングループの住まいであるダン司祭の家へ行って食事。上原君、松山君、大館さん、ベーカーさん、みんな元気で感想を述べ合いながらの、久しぶりの再会。



（完成した聖グレゴリー伝道所の礼拝堂）

3月10日（月）

この日は、当初はプエルト・プリンセサ市内観光と聞いていたが、アンダーグランドリバー（地底河川）国立公園へのバスツアーになっていた。朝、予定の7時もだいぶ過ぎて、韓国製の中古バスが来て、マリオ執事の一家も参加している。エチャネス司祭一家も、妻のレイチェルは仕事を休んで同行。パラワン島の教役者たち一家が

日本からの8人と、それにアメリカ・カンザス出身のジョンというおじさんまで加わって、10時過ぎに公園のある海岸に到着。そのまま早い昼食をとり、6人ずつがエンジンのついたボートに乗って、洞窟のある海岸までクルーズ。そのあと、ヘルメットにライフジャケットという姿で、洞窟探検の手漕ぎボートに移り、入り口から1.5キロあたりまで入る。鍾乳洞は、大変大きなもので感動。実際は8キロ余りあるらしいが、我々のボートでは、1.5キロが限界。去年はサガダで、洞窟を自分たちの足で歩いたが、今年は船で楽だった。このあたりには、オオトカゲが我がもの顔で歩き回っているが、その大きさに驚く。そして再びエンジン付きのボートで元の海岸に帰る。見学後、買い物をしたり、八口八口を食べたり。帰ってから洗濯をしたり、ちょっとのんびり。すると五十嵐主教夫人純子さんのご母堂が逝去されたことを知る。夜は8時30分からレストランで食事。刺身も出て、シーフードを楽しむ。

3月11日（火）

朝は、朝食より前に、スナックが出る。パンデサル（Pandesarl）という小さな、うずらの卵のようなパンが出て、それにクリームチーズをつけて食べるとおいしい。この日は、プエルト・プリンセサ市内観光。クロコダイルファームに行き、絶滅の危険のあるワニを飼育して、数を増やす努力をしていることを知る。その他、パラワン島の動物たちを見て回り、最後は、古澤さんと松山君がワニと記念撮影。その後、バタフタイガーデンに行く。ここの売店で150ペソ払って、パラワン島の地図を買うが、あとで本屋では99ペソだったと聞かされる。ホンダベイが観える上院議員の家で景色を眺めたり、ベイカーズヒルという、どこかで聞いたような名前の丘で、八口八口を食べる。その後、海岸でシーフードを食べるが、そこへ行く途中、ダン司祭が信者さんの店で、ココナッツワインをもらって、それを海岸に持ってくる。おいしく食べたが、大館さんは、調子が悪いらしく、ダン司祭の家で休むことになる。その後、パラワン博物館に行くが、ガイドブックの説明で、充実した内容の博物館と期待した。ところが、殺風景で、あまり感動がない。ただ、その中に出てくるパラワンの部族紹介の写真に、ナラの棟梁フレッドそっくりのものがあり、笑ってしまった。そのあと、市場に行ったが、ベトナム製のドライフルーツ風味の菓子を買ってしまい、みんなに笑われた。夜は、マリオの奥さんリンやその父親で、伝道師（カテキスト）を長年しているグレゴリオさんなども参加して、パラワン最後の夕べを行う。なかなか始ま

らないので、イライラしたが、エチャネス司祭とレイチェル夫人。ダン司祭とロメリン夫人が活躍して会を盛り上げる。日本側は、ベイカーさんが日本の歌を英語で紹介したり、参加者の感想を通訳したりして大活躍。食事のあとは、エチャネス司祭やダン司祭の取ったデジカメをテレビの画面に表示して、みんなそれを楽しんだ。来年もパラワンでワークをやるよ、と盛り上がった。

3月12日(水)

プエルト・プリンセサの空港へ送ってもらうと、ロメリンやレイチェルもやってきて、別れを惜しんだ。飛行機でマニラに帰ると、中央教区のドライバーとなかなか出会えない。事務所のレティさんに電話して、ドライバーの携帯電話の番号を聞き、やっと連絡がとれて、そのまま教区事務所のある敷地に帰る。昼食を食べた後、シャロンに頼んで、2箇所のキリスト教書店に案内してもらう。最初はカトリックの神学校があるところ。ここで新しい十字架の道行きのレリーフを見て、昨年ピサオの聖アンナ教会にあった14枚の絵を思い出した。すると実際その絵も売られていたので、2組買った。福音派の書店にも連れて行ってもらって、フィリピンバプテスト神学校の「教会指導者のための教会史」というテキストを購入。夜は、教区事務所近くのシェーキーズ・ピザレストランで食事。その後、閉店間近のスーパーで買い物。広島に「味千ラーメン」のフィリピン店の場所を調べてもらったが、電話をしても使われていない、とのこと。もうやっていないのだろうか。

3月13日(木)

タガイタイのレオン司祭の招待で、車で2時間くらいかかる聖バルナバ教会へ行く。昨年から建設されている建物で、未だ十字架のキリスト像も床に置かれている。レオン司祭に促されて、マルコスがレーガン大統領を迎えるために建設途中だった宮殿へ行く。そこからはマニラ市内や反対側にはタール湖とタール火山が見える。そこを引き返して、教会に帰り、昼食。南タガログ伝道区の集会が行われており、教区側からはレティさんも参加している。この伝道区に、パラワン島も入るが、遠いのでこの会合にはエチャネス司祭たちは加わらない。ただ、3月27日のマリオの司祭相手には、このレオン司祭とシャーウィン司祭は参加するらしい。ココナッツパイ、マンゴーなどを食べて、記念撮影をして帰る。途中、酒屋に寄ってもらい、ランバノークというココナッツの蒸留酒を3本買う。松山君と岩佐君にプレゼントした。しかし、酒を飲まない岩佐君は、沖縄でみんなと分かち合ってくれるだろう。スーパーマーケットにも寄ってもら

い、フィリピンの伝説の本を2冊購入。昨年訳した本と同じ編集者で、似たような話がある。その他、「フィリピンの歴史と政府」という本も購入。教区センターに帰り、反省会と夕食。歌や踊りのあと、それぞれ感想をのべたり、記念品をいただいたり。大館さんが生活することになりそうな神学校の寮をみんな見に行ったが、私はマリオとダグソンに司祭相手のお祝いや、教区への寄付金など、会計の仕事をレティさんで行った。ホレブハウスに帰ると、そこへ神学生や青年たちがやってきた。ニューハーフのチェイス君とは3年ぶりの再会。妻は中国人という神学生(名前は記録していない)が、私にいろいろ質問するので、それに応対し、パラワンで説教した原稿が、まだ1コピーあったのでそれを渡した。

3月14日(金)

朝、ドライバーに、運転費用の支払いをし、空港まで送ってもらった。ネッド司祭も同行してくれた。妻のグロリアさんの留学のことについて聞くと、「彼女は2年間勉強している。あと1~2年、博士課程は勉強が必要だが、首座主教はもう奨学金が出せないで、打ち切りにして、帰るように言っている。」とのこと。せっかく2年間も、多くの犠牲を払って勉強しているのに、惜しい。しかし、マニラとは違い、シンガポールの大学の学費は、とても高く、簡単には援助できそうもない。「フィリピンは素晴らしい」という印象ばかり持っていたが、貧しさの現実を示された、ネッド司祭との会話になった。マニラ空港で、岩佐君、上原君、そして松山君とわかれ、我々5人はキャセイパシフィックで香港、台北、そして福岡へ向かう。台北では、例年のようにウーロン茶をたくさん買い込んだ。来年のキャンプまで、飲めるだろう。福岡には、主教、濱生司祭、外池事務局長、簗田姉妹、山崎司祭、山口さんなど迎えに来てくれていた。菊池黎明教会の奥井さんが亡くなったことを知らされた。熊本へ帰ったら、翌日土曜日は通夜、日曜日にはお葬式ということになるらしい。急いで熊本行きのバスに乗り込んで、教会に着いたのは、11時を回っていた。

## コンセプションチームのレポート

ベイカー博士

3月5日(水)

ダン司祭と夫人のロメリンと7歳、8歳の娘さん2人。聖マタイ教会でのオリエンテーション後、昼食、その後、プエルト・プリンセサ(以下P.P.と表す)最大のスーパーで飲み水、トイレットペーパーなどの必需品の購



入。ダン司祭が毎週水曜日、夕の礼拝を行っている「洗礼者聖ヨハネ教会」に参列。3m×3m位の小さな礼拝堂で中には何もなく、説教台や椅子など持参。2005年に設立され、主に女性と子供15～16人の会衆。聖餐式は月に1回で、おとなしい方たちという印象でした。今は乾期なので水は干上がっていたが、沼の上の高床式で床は竹を割った板を渡した作り。

バナナとお芋の-snackを頂く。

夜、ダン司祭のアパートの一階の床にじかにマットレスを敷いて皆で雑魚寝。この後のP.P.での宿泊は、同じ。涼は扇風機のみ。

3月6日(木)

アパートで朝食後、ダン司祭のLANDROVER風中古車でワーク地のコンセプトへの途中、祭壇後壁用のボード等の材料を購入し、2時間ほどの舗装道路で快適なドライブ。

到着後ホームステイにするか、プエルト・リゾートに泊まるか2箇所見学したが、結局教会信徒奉事者の母上の家を私たち4人のために3日間明け渡して下さった。寝室、トイレ共に電気がなく、懐中電灯は手放せなかった。窓が開放なので、蚊取り線香は余り役立たず。荷物搬入後、200m程離れた「聖ミカエルおよび諸天使伝道所」へ。

主要道路から林の中を200m位入った草地の中にポツンと建っていて、ニッパ椰子の屋根、コンクリート床、竹を編んだ壁の4m×5m位の小さな礼拝堂。椅子も壁端の粗末な手作りのベンチのみ。

作業は内外の壁を白ペンキ、柱・窓枠を茶ペンキ、窓の金網を黒ペンキで塗ること。裏にあるトイレも同様。祭壇の後ろの壁をボードでおおい、白ペンキを塗ることなど。時間があれば、礼拝用の椅子も作りたい。

昼食、夕食共に作って来て運んで下さったものを礼拝堂の中で食す。主にご飯と肉野菜入りのスープ。バナナ、おいしい。

作業班は、私たち四人以外にダン司祭、夫人、夫人の弟、お手伝いさん、その他信徒常時5～6名。主に女性が多かった。

3月7日(金)

前日と同様のペンキ塗り。足場を組んで高い所は男性たち。昼食後は昼寝や休みをたっぷり取って再開。礼拝堂周りの雑草刈り。遅くまで働いて仕上げる。

夕食。皆への感謝のつもりで日本人組で限られた食材の

中、お好み焼きもどき、肉と野菜の煮付け風スープを作る。炭火で暗い中、懐中電灯の光で作ったので時間がかり、皆空腹で待っていてくれた。故に「おいしい！」と好評でした。

3月8日(土)

作業中、水不足でシャワーも洗濯もできなかったの、山奥の川に、洗濯、水あびバーベキューに行く。

夕の礼拝。最初の信徒さん宅で、水、電気無く、ろうそくの光で礼拝、反省、交わり、夕食と感動のコンセプトでの最後の夜。星がとても明るく大きく美しい。

3月9日(日)

白いペンキで明るく塗られたNEW礼拝堂での聖餐式。その前に、SUNDAYSCHOOLが、子供(15人)大人(12人くらい)に分かれる。子供たちは贈られた文房具でいろいろ楽しんでた。伝道を始めて1年くらいなので、大人への説教もたいへんていねいで、SHARINGと言って、一人一人の日課に対するQ+Aや意見も交えた大人のSUNDAYSCHOOLはとても良かった。

その後全員で作業終了、感謝礼拝、聖餐式。聖歌の伴奏はギターのみ。信徒奉事者から感謝の言葉を頂く。日本人組はベイカーが代表して、お礼、感想、一人一人の印象を要約して述べた。

礼拝堂前で全員で記念写真。笑顔でお別れ。コンセプトよ、さようなら。(「うるるん」の人もいたかも)

昼食

司祭夫人ロメリンの実家に寄り、母上を始め兄弟姉妹に紹介される。SEAFoodたっぷりのヘルシーなお昼を頂いて、ナラチームと合流すべく一路P.Pへ。



(コンセプトの人々と共に)

## フィリピンワークキャンプに参加して

熊本聖三一教会 ルツ 秋山みどり

今回、初めてワークキャンプに参加した。前々から一度は参加したいと思っていたので60歳になる今年、最後のチャンスと思い参加した。時はあたかも大斎節、今年は、すべてフィリピンワークに捧げよう。そんなつもりで出発した。

今まで、毎年今頃になるとワークへ行かれる小林司祭の報告を聞くだけで、なんと他人事だったことか。今回行って見て、本当にフィリピン中央教区の方たちの歓待を受け、感謝し、私たちになくなりつつある「共同体」の在り方を見た感じがした。



(日曜学校で紙芝居をする秋山姉)

司祭様達は身を挺してその中に飛び込んで生活しておられる。聞けばエチャネス司祭はマラリアにかかったことがあるという。私たちはたったの3日で教会を建てて、ああ、やり遂げたなんて喜んでいるけど、彼らはこれから先もそのことに取り組まねばならない。ここ数年フィリピンに関わって、フィリピンの良さを知って、いつもよかった、よかった、でいいのだろうか。と思う。その後がどうなったか、そこまで関わるのが本当の協働ではないだろうか。そんなことを考えると今年1年とは言っておられない気がしてきた。

日常生活で英語を必要としない私にとって、一番のネックは向こうでの言葉だった。

が、あたって砕ける、精神で行けばなんとかなるだろう、と居直り精神で出かけた。しかし、プエルト・プリンセサに着き、聖マタイ教会で一人ずつホームステイすると言われたとき、つい、一人じゃ心細くなって古沢はん奈さんと一緒にして欲しい、と申し出てしまった。

結局、最初から甘えがでてしまった。高校生の彼女に随

分頼ってしまったことだ、子どもと遊んでいるときは、あまり感じなかったことが大人だけの会話になるとつい、気後れしてしまう。相手に自分を知ってもらいたい、わかろうとする努力がたりなかったなあ、とその点は反省される。そして、子どもたちに救われてしまった。子ども達は目をきらきらさせて、私の身振り手振りの遊びに参加してくれた。

さて、今回のワークキャンプが初めてでどうこうと比較することは出来ないけど、私にとってナラでの生活は幼少の頃を思い出してそう驚くべきことではなかった。戦後生まれではあるが、鹿児島県の片田舎で育ち、兼業農家だったので、庭には鶏、豚、山羊、など家の周りにはたくさんいた。ただ、犬を食用にするというのには驚いたが、どこでも犬がうろろしているの、なるほど、と思った。それらの家畜にえさをやるのが子どもの仕事だった。ナラの子どもの達もよく手伝いをしていた、ウィークデーの日中に子ども達が家にいるというのは、日本では考えられないけど、学校に行っていないのであろうか、(サンデースクールはあるらしい)そのことをもっと聞けばよかった。ホストファミリーのリサちゃんも勉強したい、という熱意をここかしこで見せてくれた。

最後に、日本から行った若い人達が日本へ帰るときには体つきだけでなく、見違えるほど明るくたくましくなっているのにはびっくりした。向こうでの生活に不平も言わなかったし、何にでも溶け込んで、すばらしい若者達だった、このような若者たちいるかぎり日本の聖公会も捨てたもんじゃない、と思ったことだった。

とにかく、いろいろな方たちとの出会いを通して、神様を感じる事が出来たことを感謝します。いろいろな方たちのお世話になり、お祈りに支えられ、無事にワークキャンプを終えられたことを感謝します。



(ナラの子どもたち)



## フィリピンワークキャンプ ふりかえり

沖縄教区聖職候補生 イサク岩佐直人

マラリアを非常に気にしての参加だったが、結局のところ現地 Narra : ナラでは、ゴザやビニールで囲いをしただけの屋外シャワーやトイレで、1日平均10箇所は蚊に刺されていた。非常に楽しく過ごしていたため、ナラ滞在中は「別にマラリアにかかってもよい」と思えるくらいの余裕が心にあり、蚊を気にしながらの生活ではなかったことが楽しいワークキャンプにさせてくれたのかもしれない。



(ニッパ椰子の葉で、屋根を葺く岩佐候補生)

今回初参加だったが、私にとって特に良かったと思えた状況は、日本人が分かれたことである。ワーク地がコンセンションとナラに分かれたこと、更にナラではそれぞれ分かれて作業したことで個別にコミュニケーションをとることができ、わからないことをわかるまで聞くことができた。フィリピン人と日本人の団体と団体ではなく、顔の見える関係で接することができたことが非常に嬉しく、また楽しかった。

### コミュニティについて

ナラでは鍵の付いていない家、作業する仲間みんなで共にする食事、近場で用を済ませる井戸など、個人やプライベートが全く無いと言っていいほどに村の仲間と共に過ごす日々であった。日本では勝手に隣りの家に入るなどないし、近いからと言って隣りの水道を使うこともない。それどころか無断で敷地内に入ることすら赦されない。何でも分かち合い、助け合う村社会：コミュニティに初めて触れられて感動した。

教会共同体も、本来こうあるべきではないかと考えさ

せられた。「個人」はそれぞれの得意分野で働き、生活の中での「個人」、「オレ」や「わたしの」というものは見られなかった。日本の教会でも「自分・家族の救い」だけでなく、「共同体の中にある自分」がどうすべきかをもっと追求することができれば、より大きな力を持つ教会共同体へと導かれるのではないだろうか。

ナラのコミュニティで感じたことは、みんな手に何も持っていないということである。彼らは貧困などによる物理的なものだけでなく、所有・固執・執着という類の「手に握り締める」態度ではなく、むしろ「手を開いて差し出す」態度であった。彼らは元々持っていないから「握り締めない」のかもしれないが、それは逆に言えば日本人は必要以上に手に握り締めているとも言えるだろう。余計なものを1つずつ手放す、手を開いていくことが日本の教会が「コミュニティ」となっていく1歩となるのではないだろうか。

### ホスピタリティーについて

わたしの中では「相手が本来の自分でいられるようにすること」がホスピタリティーであると思っている。フィリピンにいて十二分にホスピタリティーを受けてきた。いつでも「いつものわたし」でいられたと思う。私たちのために特別なご馳走を用意してくださったこともあるが、彼らの生活の中に私たちを快く迎え入れて下さり、楽しい時間と空間を提供して頂いた。それでもナラを離れるときにある女性が「楽しめたのか？」と不安そうに聞いてきた。わたしはナラに残りたいくらいで、しかもご飯を沢山食べ過ぎて彼らの分が足らなくなってしまうのではないかと不安であったのだが、彼女はそれでも私たちの心配をされていて下さっていた。食材の一部を除いて、会話・ワークなどでVIP待遇されたとは思わず、彼らの生活の中で満喫させて頂いたことを大変感謝している。

私たちが日本においておもてなしをするとき、食事は特別なレストランに連れて行き、会話は自分の経験・業績を語り聞かせる場合が多いように感じる。その結果、相手は受身になり、窮屈さを感じさせることになるのではないだろうか。何か物を出すのではなく、相手が気楽に、いつもの様にいられるようにする配慮が私たちに欠けていると気づかされた。沖縄のテレビで、泡盛のCMに「普通の上等」という台詞がある。この心をもっと理解し深めていくと私たちにも「良い」ホスピタリティーが持てるようになるのかもしれないと感じている。



最後に

ナラの青年たちと話をしている中で、日本の「電化」生活に憧れている様子を感じた。確かに日本での便利で、フィリピンから帰ってシャワーを浴びるのにボタンを押してレバーを廻せばお湯が出ることにショックを受けた。

しかし日本人は便利さと引き換えに生活などの「知恵」を忘れつつあり、電気なしでは生きていけないほどになってきている。パソコンに象徴されるように、電化社会の行き着く先は「パーソナル」である。とても冷たく寂しいものであり、人と人の温もりを感じるができない。ナラの子供や青年が必要な教育と知識によって、パラワンが健全に発展することを祈り願っている。

今回、この機会を与えてくださった主と、フィリピン・九州教区の皆さんに感謝。

## フィリピンキャンプ感想

上原成和

私達8名(九州教区6名、沖縄教区2名)は、3月4日から3月14日までの十一日間フィリピン中央教区を訪れ、豊かな交わりと、ワークを行う事が出来ました。特に3月5日から3月12日までのパラワン島での八日間は私に多くの物を与えてくれました。それは、美味しい食事、眠る場所といった目に見えるものから私達への信頼と愛情、惜しまない心といった目には見えにくいもの、そして夕の礼拝や日曜日の聖餐式で感じた教会の兄弟姉妹であると感じさせてくれる雰囲気は本当に感動しました。

私はコンセプションという地域でワークキャンプをさせて頂きましたが、キャンプ地についた当初、もっとも私を悩ませたのは「トイレの使い方」です。水が貴重であるこの地域では日本のようなレバーを押せば流れるといったようなトイレではなく、水がバケツにためてあり、その水をペットボトルを切り取って作ったコップで掬ってうまく流すというものでした。「うまく流す！」このことがどんなに難しかったか……。最初は上手く使用する事が出来なかったもののコンセプションを離れる日には「どのくらいの水量で、どのくらいの勢いで、どのくらいの角度で！」などと頭と体が覚えるに至りました。

電気も無い、ガスも無い、水道は昼間しか使えないしその水をそのまま飲むことはできない、日本に暮らして居ると「そんなところで生きていけるか!？」などと考え

てしまいますが、神様は本当に私達人間を恵んでくださるんだ、という事がコンセプションを訪れて大変身にしました。コンセプションの人々は確かに経済的な面から言えば貧しいと言えるでしょう。しかし、彼ら(彼女ら)が私達にしてくれたもてなしは常に彼らが出せる最高のものであったと私は確信していますし、「生きる」ということに対する思いは私達日本人より豊かではないか、と感ずることができました。

もう一つ私がこのキャンプで得た事は「働くことは楽しい事であり、仕事があるということはとても恵まれていることだ」ということです。私達のグループは教会のペンキ塗りを手伝わせて頂きましたが、私は特に竹で編んだ壁にペンキを塗る作業がとても気に入りました。日本に帰って来て思うことはコンセプションにあるような家があって、それを私に塗らしてはくれまいかということです。くだらない事かもしれませんが、「くだらないと思っていた事がくだらない事で無くなる」、それがこのキャンプで私が気付いた最も大きな収穫です。本当にこのキャンプは私にとって恵みと感謝に溢れたものでした。機会があれば、とは言わず、また必ずあのパラワン島に、コンセプションの地に立つことを神様にお祈りするばかりです。



(作業の休憩中にギターを弾く上原兄)

## フィリピンワークキャンプ感想

大館明子

私は今年初めてワークキャンプに参加しました。昨年は申し込んでいたにもかかわらず、行く前になり不安で体調を崩してしまい参加できなかったのも、今回は参加できただけでも意味があったと思いました。昨年秋のフィリピン中央教区訪問ツアーで一度フィリピンには行

っていたので、不安はありましたが、またフィリピンの皆さんに会える喜びと、今年の6月からフィリピンで英語の勉強をすることにしていたので、その準備のためにはどうしても行きたいという思いがあり、勇気を振り絞って参加しました。

3月3日(月)に福岡の教区センターに集合し、まず献品する文房具などを仕分けをし箱詰めをしたのですが、これが大変でした。山のような文房具の量に大変驚きました。持っていける量には限りがあり、ぜんぶ持って行けないことが残念でした。それでも、仕分けは大変な量で、終わったときには既に疲れきっており、こんなことで疲れていてフィリピンでワークなんてやれるのかなととても不安に思ったことが印象に残っています。私は、自閉症があり他の人の何倍も疲れやすいため、参加者のみんなが元気に仕分けをしているなか、私は既にその場に座り込みたいほど疲れていてとても不安になったのでした。それが終わってから途中食事や買い物をして福岡ベテル教会に移動しました。その後、しばらくワークキャンプの打ち合わせなどをし、女性陣は先に就寝することになったのですが...どこからかフルートの音色が聞こえてきて、みんな寝ようと思って布団に入り電気も消しているのに、フルートの音がはずれるたびに、女性の部屋ではみんなが吹き出してしまい、なかなか眠れませんでした。もちろん朝早くから(4:30くらい)フルートの音と歌声に起こされてしまい、この日から私の寝不足が始まったのでした。しかし、教会では聴かせてもらえない小林司祭のフルートの演奏が聴けて、嬉しかったです。



(子どもたちと遊ぶ大館姉)

3月4日(火)ワークキャンプ一日目この日はひたすら食べてひたすら移動の一日でした。福岡から台北、そして香港、マニラと3回も飛行機を乗り継ぎました。この日は不安といえば体力がもつかな~という程度で、早

くフィリピンに行きたい、早くフィリピンの人に会いたいと、ワクワクした一日でした。この日は朝食、機内食3回、フィリピンの教区センターでの夕食と5回も食事をして我ながら良く食べるなー、ワークキャンプの間に何キロ太るのかしらととても心配になりました。この日の移動そして飛行機の乗り継ぎは体力のない私にはとても疲れてつらいものでした。多分、度重なる手荷物チェック、ボディチェックで慣れないことが苦手で大きなストレスになる(自閉症のため)私は精神的にもかなり疲れたのだと思いました。今度フィリピンに行くときは絶対直行便で行こうと思いました。この日はホレブハウスに宿泊しましたが、教区センターでの食事を終え、コンビニで虫除けを買い(マラリア予防のため)、その後メンバーの松山君にネッド司祭の家に連れて行ってもらい、ようやくホレブハウスに帰り着いたときにはかなり遅い時間になっており、疲れすぎて頭は痛いし、倦怠感が強く、こんなに体調が悪くて本当にパラワン島に行けるのかと不安に思いつつ、とにかく明日のために早く寝なくてはと思い、急いでシャワーを浴びて薬を飲み就寝しました。ホレブハウスはとりあえず水のシャワーが出たトイレには便座があり水洗だったので大丈夫だったのですが、それでもこの時点では、慣れないシャワーの使い方に戸惑い、どうしようフィリピンでうまくやっていけるのかなと不安に感じました。(6月からの生活で)私は自閉症で環境の変化や日常生活の変化に弱く、いつもと違うことがなかなか受け入れられない特徴を持っていて、なかなか環境の変化に適応できないので、ちゃんと適応できるかなと不安に思い、頑張って適応しなくてはと思ったのがとても印象に残っています。この日初めてフィリピンのコンビニに行ったのですが、コンビニに警備員がいて、その後も薬局などに警備員がいるのを見て、あ~日本とは違うんだな、やっぱり治安が悪いんだなと思いとても印象に残っています。

ワークキャンプ二日目、この日はマニラからパラワン島へ飛行機で移動しました。前日は薬を飲んで眠ったため熟睡はしたものの、他の人の何倍も疲れやすい私はその分多くの睡眠時間が必要なので、睡眠時間は全然足りておらずこの日も寝不足で立ちくらみや耳鳴りに悩まされるようになり、これは日本に帰ってくるまで続きました。パラワン島に行く飛行機の中では、他の人はクイズ大会があったと言われていますが、私は全く気付くことなく熟睡していました。パラワン島ではとても小さな空港でしたが、飛行機がつくと吹奏楽の歓迎の音楽で迎えてくれてとても印象に残りました。空港にはパラワン



島のエチャネス司祭やダン司祭が迎えに来てくださり、早速聖マタイ教会に行きました。そこで簡単なワークのオリエンテーションを受け、レストランで食事を取り、水や食料を買い込んだ後、ナラグループがナラに出発するためコンセプトグループはバスターミナルでナラグループを見送って、コンセプトグループはその日はダン司祭の家に宿泊するため、ダン司祭の家に行き休憩した後、女性二人は午睡をし、若者二人は早速海に行って遊んできたようでした。この日はある教会で夕の礼拝があるため出席しました。礼拝はタガロク語で進められたので全く分かりませんでした。司祭が福音書の内容を説き明かし、信徒の方がそれぞれ聖書の内容についてシェアリングし、とても豊かな時間が持たれていたことに感動しました。日本では礼拝でシェアリングをすることなどなく、聖書朗読の後は数十秒の黙想しか持たないのに、フィリピンの人たちは本当に神さまの御言葉を学んでいるのだなあと思い、羨ましく思いました。その後ダン司祭の家に帰り夕食をとったのですが、ここでまた驚くことがありました。ダン司祭の家族は4人にお手伝いさんが一人と聞いていたのですが、何回数えてもそれより人数が多いのです。これはこの日に関わらず私たちがいる間ずっとそうでした。しかし、メンバーは変わるのです。ワークの最終日ようやく分かったことですが、この日泊まっていた女性と子供はダン司祭の家から2時間近くかかるワークをした教会のすぐ山の上に住んでいる信徒のおばあちゃんと孫であったことがわかりました。ちなみに、ワークが終わり日曜日の礼拝後ダン司祭の家に帰ってきたときには、その孫とお母さんが一緒に司祭の家に泊まりにきていました。しかし本当に信徒の人とは分からず、本当の家族のようには見えません。フィリピンの人は本当にみんなが神の家族として助け合って生きているのだなと、とても暖かいものを感じました。ちなみにこの日の夜中、私たちが寝ているリビングを歩いてまたひとり男性が泊まりに来ました。この日は薬を飲まずに(よく眠れる)寝たので、あまり眠れずに睡眠不足でした。

次の日はワーク一日目、起床しお祈りをして食事、出発する前に庭でお祈りをした後ワークをする教会へと出発しました。この日からダン司祭の二人の娘さんも学校はお休みでみんな揃って出発しました。(ダン司祭の奥様ロメリーは仕事の関係で次の日合流されましたが)約2時間かけて教会へ到着。教会ではすでに子供たちが教会の掃除をしながら私たちの到着を待っていてくださいました。お手伝いをしてくださる方に挨拶を済ませ

ると早速ペンキ塗り開始！教会を建てるナラグループと違い私たちコンセプトグループは内壁外壁のペンキ塗りだけなので「ゆっくりやらないと一日で終わるかも」とか「今日一日で終わらせて後は遊ぼう」とか言いながら楽しくペンキ塗り開始！私はペンキ塗りは初めてでしたが、とても楽しくて、みんなも熱中してやっていました。でも初心者には少々難しく教会の方に習ったり、真似をしたりしながら少しずつ上達していきました。私も頑張ろうと張り切っていたのに、睡眠不足と体調不良で立ちくらみ、めまい、耳鳴りに悩まされ、椅子に座って塗ったりとゆったりペースでしか出来ませんでした。しっかりと炎天下の元でお昼寝もしました。教会の敷地内でお母さんたちは草取りをし、子供たちは遊び飛び跳ね、数人の教会の方と私たちでペンキ塗りと和気あいあいとやりました。食事の間にはお芋やバナナやココナッツを使ったスナックを食べ、甘い甘いマイロ(ミロ)を飲み、昼食には山で捕まえてきた庭でコケッコウと鳴いているワイルドチキンを食べ、ほんとによく食べました。私がここでびっくりしたのは、フィリピンの人は本当に甘いものが好きということ。ただでさえ甘い、もともと砂糖の入っているマイロにさらにスプーン2杯の砂糖を入れ、砂糖たっぷりのコーヒーを飲み、グリーンティーにもたっぷりの砂糖を入れ飲んでおられるのにはビックリ！ダン司祭は特に砂糖入りのグリーンティーを気に入っておられました。子供たちはと言えば、私たちがバックをあけるたびに(ただ探し物をしているだけなのに)何かおいしいもの、お菓子が出てくるのではないかと寄ってきて、私が飲んでいる薬を欲しがられたときにはさすがに困ってしまいました。ここの教会で印象に残っているのはとにかく男性が少ないということ。女性と子供は沢山いるのに男性が少ないのです。きっと仕事がなくで出稼ぎに行かれていたのだと思いました。この日は夕方6時くらいまでペンキ塗りをし、夕食をいただきました。夕食はイリコとかぼちゃ、おくら、なす、インゲン豆など野菜の煮ものでしたが、普段日本ではイリコの入った煮ものが大嫌いであまり食べないのに、この日の煮ものはおいしくておいしくて！労働のあとで(大して働いていませんが)お腹がすいていたから美味しかったのか？よくは分かりませんが。この日も夕食の後、夕の礼拝があり福音書が読まれ司祭による福音書の説き明かし、そしてシェアリングがあり豊かな黙想のときもたれました。その後、ホームステイ先の家へと向かいました。その家には教会のとなりの家のナナ(おばあちゃん)が一人で住んでおられ(この家は

教会から歩いて20分くらいのところにある)、おばあちゃんは敷地内の小さな高床式の古い家に移ってくださり、家をそのまま私たちだけのために貸してくださいました。想像していたよりもはるかに素敵な家でベッドがあったのにビックリしました。一つの部屋にはベッドが二つあったのでそちらに男性陣に寝てもらい、もうひとつの部屋にはベッドが一つだったので女性一人がそちらに寝て、私はリビングに急遽ベッドを一つ作ってもらいそこで寝ました。マラリアの予防のため蚊取り線香を焚き、夕方6時になると虫除けローションを体中に塗り夜を過ごしました。何もすることがなく、疲れていたのですぐにベッドに入りましたが、唯一リビングにある電気が眩しくて私はあまり眠れませんでした。その電気と言うのがスイッチがあるわけでもなく、隣の家から電気を引いているので、隣の家が電気を付けると付く仕組みになっていました。コンセプトではやはりトイレの使い方、流し方が大変でした。なかには流し方を研究してマスターしたと言う参加者もいましたが、私はだめでした。水も朝しか出なくてずっと貯め水を使っていたので、シャワー(水浴び?)をすることも出来ませんでした。ただ、洗濯だけは二日目の朝に貯め水ですることが出来ました。ここでは本当に水が大変貴重なものであることがわかりました。朝しか水が出ないと言うことは日本では考えられないことで、結局慣れることができず、メンバーの中では私が一番適応で来てなかったと思いました。朝からそこの家の二十歳の娘さんがささっとシャワーを浴びられる(水浴び)のを見てすごいと感動してしまいました。生まれたときからずっとそこで生活されているのだからその人にとっては当たり前のことなんだなと思いました。

ワーク二日目、この日はホームステイ先の家にダン司祭が朝食を持ってきてくださいました。この時に、私はカラマンシーを丸のまま食べてカラマンシーにはまってしまった。ふつう、カラマンシーというのは料理にかけて食べたり、絞って水の中に入れて砂糖を入れて甘くしてジュースとして飲むのだが、私はなんだか疲れていて無性に酸っぱいものが食べたかったので、みかんのように皮をむいてそのまま食べてみたら、美味しいのなんのって！はまりました！でもそう感じたのは私だけらしく私に半強制的に食べさせられて被害にあった人がいたようでした。ゴメンナサイ。でも未だにカラマンシー食べたい病は治っておらず、カラマンシーとシークワーサーが同じものようで、早速スーパーにシークワーサー100%果汁を買いに行きました。でも、う～んな

んか違うのです。やっぱりカラマンシーが食べたい！沖縄にはシークワーサーがあるらしいので「ジョシュアー！(上原君)シークワーサーを送って～」という気分です。さて、朝食が終わったら、タガログ語・英語・日本語で三人がお祈りをし、教会へ行き今日もワーク！始める前にダン司祭から「今日中に仕事を終わらせて、明日は海か川に遊びに行こう」と提案があり、川に行くことに決めて、張り切ってペンキ塗り開始！じつはこの川に行くと言うことはダン司祭一家にとってもとても必要なことだったようです。それは川に行った日に気付くのですが。この日は竹で足場を組んで高いところのペンキ塗り。最初に組んだ足場は竹が弱かったのが、教会の方ですっと手伝ってくださったペンキ塗りの達人の女性のぼったとたん、バキッと折れてしまいました。それでみんな大騒ぎ。タガログ語で壊れると言う意味の「バリバリ、バリバリ」という言葉がこの日はずっと叫ばれていました。子供は足場の竹にぶら下がったり登ったりして、お母さんが足場にのぼってペンキを塗っているにもかかわらず、足場を揺らし、みんなで「バリバリ」と叫んでいました。そういう私もペンキを塗ろうとプラスチックの椅子にのぼった時、ペンキがついているところを避けて弱い部分に乗ったため、「バリバリ」と椅子をバリバリしてしまい、みんなから笑われてしまいました。貴重な椅子を壊してしまい本当に申し訳なく思っています。この日は意外と早くペンキ塗りが終わり、ダン司祭が一人で一生懸命ペンキ塗りの後片付けや、椅子などに付いたペンキを落としておられる間、私たちは取った草を燃やしたり子供たちはその草を運んだりして外でわいわいと遊んでいました。本当にまめによく働かれる司祭様だなあと皆で感心し、だからパラワン島でこんなに宣教できたのだらうねと話していました。この日は私たち4人が日本食を作ることになり、買い物に行く予定でしたが、なかなか出かけられず、結局買い物に行ったのはいつもなら夕食を食べている6時半くらいでした。買い物に行ったけどなかなか必要な食材が手に入らず、手に入ったものでお好み焼きと野菜とコンビーフの煮もの(当初は肉じゃがでしたが)を作りました。が、料理をするのがとても大変でした。私はお好み焼きのためのキャベツを千切りにする係りでしたが包丁はあるもののまったく切れず苦労しました。私が千切りするのを見て青年二人が「本当に料理できるんだ～」と驚いていたのにはちょっとショックでした。私は普段でも夕方になると疲れて倦怠感がひどくなり動けないほど体調が悪くなるのに、この日は特に遅くなったため、その場



に座り込みたい程で体調が悪く、みんなが頑張ってお好み焼きを焼いている間私は全く役に立たず申し訳なく思いました。お好み焼きは一枚一枚焼かなくてはいけないので時間がかかって、教会でお腹を空かせて待っていた方々には申し訳なかったなと思いました。でも、皆さんがお好み焼きも煮ものも美味しいと喜んで食べてくださったので良かったです。その後はまた夕の礼拝があり、その後家に帰り料理の後片付けをしましたが、その日はコンビーフ・ミートローフ・ツナの缶詰を使ったため油でベトベトで洗剤も無く洗うのがとても大変でした。普段フィリピンではこんな油ものはあまり食べないのだろうなと思いました。ナナ(おばあちゃん)の台所をベトベトにしてしまって、また暗いなかで片づけをしたので洗い忘れたものがあり、次の日流し台の周りを蟻だらけにしてしまって、本当に申し訳なかったなと思いました。

次の日、私たちは、ダン司祭の家族やホームステイ先の娘さん(アイサ)、教会の信徒さん、子供たちと共に川に遊びに行きました。川に着くと早速、若者は川に飛び込み思いっきり泳ぎました。私は普段は川などで泳ぐのはあまり好きではないのですが、アイサに誘われて、私も洋服を着たまま飛び込んで遊びました。ダン司祭一家はワークの間は教会のすぐ近くの信徒の家に宿泊されているようで、洗濯も出来ず、シャワーも使えなかったようで、川に着くとお手伝いさんは川で洗濯をされ、ダン司祭は奥様のロメリンに髪を洗ってもらわれました。だから川に来る必要があったんだなと思いました。川では、なかなか石の上をうまく歩くことが出来ず私などは何度も滑りながら歩いていたのに、子供たちは上手に歩いていて、やっぱりフィリピンの子供たちは毎日裸足で飛び回って遊んでいるから足が鍛えられているのかなと感心しました。私たちも子供の頃はそういえば裸足で外を走り回って遊んでいたなと思い出しました。私たちが泳いだりして遊んでいる間、フィリピンの女性たちは昼食の準備をしてくれていました。前日山で捕まえてきたワイルドチキンを川まで持ってきていて、それを殺して皮をはぎ料理していました。食事の後には山の中にフルーツを探しに行こうとアイサとアイサの家のお嫁さん(と言っても17歳ですが)に誘われて松山君や上原君と共に行きました。行く途中鬼ごっこをすることになったのですが普段走ることも無いのでもう走るのがきつくてきつくてさすがみんな若いな~と思ってしまいました。(私とみんなは10歳くらいも歳が離れていた)残念ながらフルーツは無かつ

たのですが、私の大好きなカラマンシーが実っていました。それを若者に取って貰おうと思い、初めは松山君が木に登ってくれようとしたのですが、上手く登れず、女の子のアイサが上手にスルスルッと登ってくれてカラマンシーをとってくれてとてもうれしかったです。また、アイサが自分はサリサリストアで働いて収入を家に入れているけども両親は仕事が無く自分たちの家はまだ完成してなくて壁が無い、お金が無くて大学を辞めた、日本に行ってビッグビジネスをしたいから助けて欲しいと涙ながらに話してくれたことが心に残っています。その後車で家に帰りましたが、川に飛び込んで濡れた洋服も着替えることも無く帰る頃にはしっかり乾いていました。この日は一度家に帰り休憩した後、教会のすぐ上の山にある信徒さんの家に行きスナックを食べ夕の礼拝をしその後夕食をいただきました。この家はかなり急な斜面の山道を登らなければならず、また家には水が出ないそうで、毎日水を汲みに教会のところまで降りていってると言うことを聞き、本当にすごいな、たくましく必死で生きておられるのだなと思いました。またみんなが同じ家族のように見えていたのですが、どの人がどこの家の人なのかその場で教えてもらい、やっと理解できました。その日の夕の礼拝ではダン司祭の奥さんのロメリンが福音書を説き明かしてくださり、みんなでシェアリングをし、また皆さんと過ごす最後の夜だったのでワークキャンプについての感想をみんな一人一人言いました。ペンキ塗りはあまり出来なかったけど、教会の方たちと自分の苦手な英語を使いながらも一生懸命コミュニケーションを取り、共に働き、共に遊び、礼拝し、祈り、本当に豊かな交わりを持つことが出来て幸せなときでした。

次の日は日曜日、コンセプトで過ごす最後の日であり、礼拝の日でした。

この日は初めて家から歩いて教会に行きました。朝からとても暑く熱射病にかかりそうでした。行きにサリサリストアでコーラを買いピニールに入れてもらいストローで飲むのを体験しました。教会に着くと、サンデースクールは始まっており、子供のほうは教会で奥さんのロメリンが賛美歌を使って英語を教えたり、アイサが話をしたり、歌に合わせて踊ってました。大人のほうはダン司祭が隣の信徒の家で罪について教えておられました。礼拝の前に大人の為のサンデースクールがあって勉強されているのを見てとても羨ましく思いました。しかし、この日一番印象に残っているのは聖餐式での説教でした。説教の内容自体はタガログ語だったのでわかりませ

んでしたが、ダン司祭は原稿など見ることなく話をされ、聴いてる信徒や子供のところに歩いて行かれ、信徒に語りかけそれに信徒が応答するという説教をされておられ、本当に村の人に福音を宣べ伝えておられるんだなと感動しました。パラワン島に宣教を始められ、伝道所が出来、そして今の教会にまで成長したのは、やはり司祭が家族と共に村人の中に入り共に生活し、日々村の人に福音を述べ伝えて来られたからであるという様子が目に見えるような説教で感動しました。礼拝後は、すぐにコンセプトの人とお別れし、プエルト・プリンセサのダン司祭の家に向かって出発しました。途中でロメリンの実家で昼食をいただき、ココナッツジュースを飲み、実を食べました。また、その日の夕食用に庭では木にゴート(やぎ)が吊るされて何時間もバーナーで焼かれています。その日の夕食ではやぎとイノシシを食べましたが、殺す前にお酢を大量に飲ませておいたから臭くないということで美味しくいただきました。また、この日はナラグループとコンセプトグループが久しぶりに合流しお互いの体験を語り合えたことがとても心に残りました。

翌日からはパラワン島観光、この日は地底河川国立公園のバスツアー。かなり古いバスに乗り(座席が壊れているところもあったようだ)ガタガタ道を揺られて揺られて2時間近くかかったと思う。他の人は大変だったようだが、私は行きも帰りもバスの中で熟睡してしまった。(寝不足が続いていたので)ここでは、洞窟の中を見学したことよりも、洞窟のある公園まで海をボートに乗って渡ったことがとても潮風が気持ちよく楽しかったと思いに残っている。しかし、このボートに乗ったのがいけなかった。見学が終わった後は、貯め水で足を洗い足についた砂を落とした後、みんなで八口八口を食べて帰り、エチャネス司祭の家に帰り、みんなでワークの思い出話などをしてゆっくりした時間を過ごした。

翌日はパラワン島観光。この日は出かける前から倦怠感が強くかなり体調が悪い。私は自閉症でとにかく集団行動が苦手で、じつは母と買い物に行くだけでもひどく疲れてしまい具合が悪くなって途中で動けなくなってしまう。もちろん観光などと言うのは大の苦手だ。こんな体調の悪い日に観光だとは憂うつになる。しかし、仕方が無い。まずはクロコダイルフームに行った。私はこれまた自閉症のせいであんなにいろいろなことに興味をもつことが難しく、興味の無いことには集中できない。集中力がとても弱い。だから、いろいろな、みんなが常識として持っているような知識も身につけておらず、知能が

正常以下である。だから、クロコダイルフームの見学はとてもきつかった。それになぜかひどい倦怠感、たちくらみに襲われもうその場に座り込みたくて、もう歩けないという感じだった。この日はここでダウン。熱も出てきたようで車に残り寝て過ごす。原因がわからず疲れすぎたせいかなと思っていた。とにかく皆が海で昼食を取り終わるまで寝て過ごし、いったんダン司祭の家に寄ってもらい私は家で寝ていることにした。本当に皆さんには迷惑をかけて申し訳なかった。家で休んでいると他のメンバーも帰ってきて、子供やロメリンも学校や仕事から帰ってきた。私が体調を崩しているのを見て、ロメリンはクーラーの効いているご夫妻の部屋で私を休ませてくださった。そのときには恥ずかしがっていた子供たちも私の近くに来てくれて自分たちやロメリンの写真や成績表をみせてくれた。とても楽しい時間だった。その後体はきつかったものの、パラワン島最後の夜を聖マタイ教会の方々と共に過ごした。教会に行くときにはロメリンと子供たちと共にトライシクルに乗るという体験をさせてもらった。教会で皆が食事をしている間、私はふと足首が痛いことに気付いた。よくみると、そこは私が痒くてかきむしり傷のあったところだ。なんと化膿して足は腫れている。熱の原因はこれだと気付いた。そして、前日海でボートに乗ったときに、海水に足をつけたときか、貯め水で足を洗ったときに細菌が入り込んだのだと気付いた。看護師のロメリンに聞いてみるとやはりそうとのこと。教会からの帰りロメリンは薬を薬局で買って処置してくれた。その日はロメリン夫妻の部屋で子供二人とロメリンと私と4人並んで寝たことがとても心に残っている。

翌日、パラワン島に別れを告げ、マニラへと帰った。マニラへ帰る飛行機のなか、体はだるくてだるくて、座っているのがきつく、身の置き場のないようだった。やっとホレブハウスに帰りついたが、昼食も取れずダウン。その日皆はキリスト教書店に行ったそうだが私は行けなかった。書店大好きな私としては、こんなに残念なことはなかった。いまでも悔しいと思っている。夕食は何か皆と行けて、夜にはスーパーマーケットでの買い物も楽しんで、元気に歩いて帰ってきた。しかし、足だけは痛いし腫れるし、色が紫色に変わっていた。

翌日は皆と一緒にタガイタイにいきレオン司祭のいらしやる教会では二年前にワークキャンプに参加したいとこの写真を見てきた。そこで食べたブコパイは忘れられない。温かくて、ブコのいい香りがしてココナッツ嫌いの私も忘れられないくらい美味しかった。ちなみ



にブコとはココナッツのことである。それにココナッツ入りのカレーも美味しかった。何だか食べ物のことばかりだが。帰りに教区センターの近くのショッピングモールに行き本を買った。フィリピン最後の夜、反省会の後九州教区が援助している神学生に私が住むことになるはずだった寮を案内してもらった。とても楽しいときだった。

翌日フィリピンに別れを告げ、帰途についた。この日も3回の乗り換え、3回の機内食。この日はさすがに足が痛くて、台北空港では私一人だけ飛行機を降りず乗ったまま出発を待った。こうして無事福岡空港に帰り着き、たくさんの方が空港まで出迎えに来てくださり本当に感謝でいっぱいだった。この日は女性陣はホテルへ宿泊。ゆっくりシャワーを浴び気持ち良くベッドで眠り、翌日は皮膚科で傷を見てもらい熊本へ帰り着いた。このワークキャンプでもっとも嬉しかったことはあんなにおとなしかった沖縄の上原君がとてとてもとても明るい青年になり帰って来たことだった。さぞ沖縄の方はビックリされただろう。

このワークキャンプに参加するに当たり、本当に多くの方のお支えと、祈りがあったことに本当に感謝しております。そして、私が今回参加できるようにお導きくださった神様に感謝しております。日本とフィリピンで離れてはいますが、これからも同じ神の家族として、神さまを礼拝、賛美しもっともっと交流を深めていくことができますように、お祈りしたいと思います。

最後に、このワークキャンプを通じて私が一番学んだこと、それは自分の障害と向き合い、そして本当に障害を受け入れるということでした。他の人との体力の違いを本当に感じ、自分の苦手なこと、できないことを嫌と言うほど思い知らされました。あるとき、あるメンバーに私は自分が自閉症であるために、こんなことが苦手なんですと打ち明けました。その時返ってきた言葉は「そんなことのせいにしちゃ駄目」でした。本当にショックでした。やっぱり理解されない、涙が出そうな思いでした。いつも理解されない、また理解されなかったと思いました。こんな日私は必ずこんな夢をみます。「なんで私の苦しさを理解してくれないの！なんで私のことを理解してくれないの！」と私が泣き叫んでいる夢です。でも理解されなくて当たり前なのかも知れません。なかなか目には見えないし、その苦しさを表現できないことが障害の一つであるし、今までの人生でいかに自分の苦しみ、つらさを隠すかということだけを習得してきたのですから。隠すのだけは上手です。でも自分のことは自

分だけにしか理解できなくて、自分で自分を守っていくしかないという今回のワークキャンプを通じて学びました。それに神さまは私の苦しみを見ていてくださると分かっていますから。だからもう自分に出来ないことを無理してやろうとするのではなく、本当に障害を受け入れてまずありのままの自分に満足して、そこから少しずつ成長していけたらいい、自分に出来ることをやっていけたらいいなと思いました。本当に大事なことを学ばせていただきました。

さまざまな事情で私がフィリピンで英語を学ぶことは実現できそうにありません。でも私はますますフィリピンが大好きになりました。必ずまたフィリピンに行きたいと思っています。

最後に、ロメリンをはじめ沢山の方に親切にしてください、また九州教区と沖縄教区の人たちと交流を深めることが出来たこと感謝いたします。

## 2回目のワークキャンプ

古澤はん奈

2回目のフィリピン。今年はルソン島ではなく、パラワン島でのワーク。去年にも増してたくさんの思い出をつくり、帰ってくる事が出来た。

### 1. パラワン島に行くまで

私は日本の国内線に乗ったことが無く、まさか先にフィリピンの国内線に乗るとは思って無かった。飛行機はマニラからパラワンのプエルト・プリンセサまで1時間あまり。離陸してからしばらくすると、機内でクイズ大会。そしてその後は物販。なんか日本の電車やバスの中みたいでなかなか面白かった。

飛行機から降りると迷彩服を着た人たちが音楽を演奏していてびっくりした。

### 2. ナラでの出来事

パラワン島に着いたその日の午後、バスに乗り2時間程かけてナラ(Narra)へ行き、四日間を過ごす家へ。トイレやお風呂など教えてもらった時、正直無事に過ごせるかな・・・と秋山さんと話したりしたけど、二日目からは平気になり、普通に過ごせるようになっていた。これが『習うより慣れる』という事だな、と思った。

二日目からワーク。今年もペンキ塗りと思っていたので、教会を三日で建てるって聞いた時は有り得ないと思った。でも三日で本当に建ってしまったので、本当にびっくりした。私は釘打ち、木を切る、計算をする事のみで、直接的には関われ無かったが、今年には子供が多く、毎日

折り紙を教えたり、絵を書いたりなどして遊び、多くの子供たちと関わることが出来て本当に嬉しかった。ナラでの最後の日に子供たちから貰った、たくさんの絵や手紙は私の宝物だ。

ナラでの食事は初日の夕食に犬、最終日の昼食にはヤギが出た。去年のワークキャンプをした所でヤギ料理が出て、その臭いや味が凄まじく、私の記憶に強烈に残っていたので心配だったが、今年は克服出来たので本当に良かった。

### 3. 観光

プエルト・プリンセサでは地下河川公園、クロコダイルフาร์มにバタフライガーデンなど。ルソン島に帰ってきてからはタガイタイのタール火山。また一つ世界自然遺産を見ることができ、またワニと一緒に写真撮影もし、貴重な体験となった。



(クロコダイルフาร์มでワニを持つ古澤姉)

### 4. 最後に

今年のワークキャンプは、人との関わり合いが去年よりも濃かった、という事が一番の印象にあった。ナラでのホームステイでは女性と男性で宿泊した家が違うのも良かったかもしれない。去年よりも多くの人たちと英語でコミュニケーションをとることが出来たのでほんの少しだけ英語に自信がついたし、もっと勉強しよう。と思った。

まずはマニラのキリスト教書店で購入した英語の本を地道に訳していこうと思う。

また来年もフィリピンワークキャンプに参加したい。

## ワークキャンプの全体的感想

ベイカー博子

私の中では10日間が1ヶ月位にも感じられた程、素晴らしい内容の濃いキャンプだった。

パラワン州の伝道所の中でも最も貧しいと思われるコンセプションの聖ミカエル教会の信徒やその家族の方々と一緒に作業や交流が、一番私の心の琴線に触れた。



(山の民、バタック族の人々と会うベイカー姉)

まだ、1年程のミッション地であるが、一人の女性信徒から始まり、その一粒の麦から大人子供合わせて30人位の会衆にまで育ち、貧しくて自分たちの家さえ完成していないのに、先ず「祈りの家」を完成させたいという意欲に信仰の深さと強さを感じさせられ、刺激を受けた。

わずか2~3日のワークでどちらかと言えば自己満足の域を出なかったと思うが、私たちが日本から来てくれているという事実と存在そのものが皆さんをとて力付けているという事を司祭に言われ、面映い気持ちであった。

もっとワークの量があっても思ったが、貧しい土地では受け入れ側も色々苦労があるのかもしれない。忘れられない会話がある。

「こちらの皆さん、ホントに歌がとても上手いですよネー！」「何も食べる物が無い時には、歌うしかしようがないのよ。」私「……………」

完成を祝う聖餐式では世界のどこに住んでいても、主にあって一つに結ばれていることを実感し、キリスト者であることの大いなる恵みに感謝感激であった。

又、若いキャンプ参加者達が水無し、電気なし、トイレの不便さなどにもかかわらず、すぐに順応し、文句一つ言わず、大いに働き、食べ、大いに楽しんで交流し、



全てを吸収して、短期間のうちに自分達を成長させていくのを目の前で見られたのは、予想外の喜びであった。洗面道具を失くしたとか、シャンプーできないとか、顔がちゃんと洗えないとか、蚊に刺されたとか、そんなことは、2～3日すると「まっ、いいか」となるのが、不思議である。

与えるよりも、与えられることの方が大きかったのは確かで、もっと沢山の若者達にこの魂の充実感を味わって欲しい。来年も、再来年も、ふるって参加して頂きたい。私は勿論「余り仕事をしない、ウザイ、おばさん」と思われても、任期中は、毎年参加続ける所存ですので、悪しからず！！最後のスピーチでは、コンセプトチームの全員が「I SHALL RETURN!」と言いましたよ！

最後に常に明るく楽しく、寛大に家族としてお世話下さったダン司祭ご夫妻と家族に感謝！

このプロジェクトをご支援、お祈り下さった、フィリピン中央教区、九州教区の皆様方に感謝！

そして私達をパラワンへと導いてくださった主に感謝します。(H.B.)

## フィリピンワークの感想

松山省太郎

今回でこのワークキャンプは3回目だったせいで、慣れがあったのかフィリピンの生活にもすぐに順応でき特に問題も無く楽しく過ごすことができた。今回が一番、生活状況が厳しい地区だったが逆に楽しかった。ホームステイした家は隣の家から電気を引っぱってたし、水道はAM6時からAM12時までしかでない、もちろんガスなんて無し！シャワーなんてものもあるはずも無いので、川に行ってみんなでシャンプーをしたことは衝撃的でしたねえ。食材も狩ってきたチキン、ヤギなどなど。数時間潮干狩りもしました。

ワークは今回はペンキ塗りでした。基本的に屋根があるところで塗っていたので、去年のように炎天下の中で作業しないといけないということはなく比較的楽にできました。竹でできた壁を白に、木でできた柱やドアは茶、鉄のフェンスのような窓は黒で刷毛やローラーを使ってペイントしました。毎年着ているつなぎに働いた証が年々増えていっているの次は何色が追加されていくのか楽しみです。



また、今年のフィリピンワークは一番多く友達が作れた年でした。ホームステイしたコンセプトでたくさんの子供たち、プエルトプリンセサでの青年たちやカラバオ、マニラの神学校の生徒。コンセプトでは生まれてはじめて間近で『ゴム飛び』という遊びを見ました。日本にもTVゲームなんて無かった頃の昔にあった遊びで、見たこと無かったので驚きました。メンコモしてる子供もいました。その出会った友達に手紙を送ったり、メールのやり取りをすでに行ってます。毎回、貴重な体験をさせてもらってとても感謝しています。フィリピンの発展のため、フィリピン中央教区と九州教区の交流のためにこれからも力になりたいと思います。いつ、フィリピン語をスラスラ話せるようになりツアーコーディネーターとして皆様をフィリピンでお迎えできる日は来るのでしょうか。笑

## 今後の展望とお知らせ

### 1. 来年もパラワンでワーク

今年は、マニラを遠く離れて、自然豊かなパラワン島でのワークになったが、タクロバオ主教(フィリピン中央教区)は、来年もパラワンで、マリオ新司祭の働くタグサオの教会や伝道所を支援することを計画している。予備知識が、あまりなかった今年とは違い、1年かけてパラワン島の司祭たちと連絡をとりながら準備ができることが大きい。沖縄からも大勢の参加者があるとうれしい。

### 2. 秋にフィリピンの司祭が来訪予定。

今年もフィリピンから司祭を招きくことにしている。未だ、来る司祭の名前が決まっていないが、昨年同様、日曜日を3回日本で過ごせるように、計画を立てようと考えている。

3. フィリピン協働委員会は、第3期の委員会が発足し、柴本孝夫新委員長が就任。このほか、五十嵐正司主教、小林史明司祭、外池圭二、ベイカー博子、山口明美、山崎貞司司祭、が委員会を構成し、今後の計画と立てる。

4. 近いうちに、フィリピンワークキャンプに関するパンフレットを発行し、活動を紹介する予定です。

今回のキャンプ特集についての感想や質問、意見など、お寄せください。連絡先は、

〒862-0956 熊本市水前寺公園 28-14

熊本聖三一教会内 小林史明司祭宛

電話&ファックス 096-384-3202

携帯電話 090-1367-6818

E-mail f-frank@kind.ocn.ne.jp



3月9日(日)「すし太郎」で、日本食を作る。

## キャンプスナップ



ナラの管理牧師エチャネス司祭一家。



3月8日(土)川でシャンプーをしてもらおうダン司祭と妻のロメリンさん。彼女は普段は看護師。



ナラの礼拝堂を建てる大工のフレッドさん(中央)



3月7日(金) コンセプションの人々に感謝のお好み焼きを提供する。礼拝堂で会食。